

地方都市郊外居住者の外出行動と地域愛着に関する考察

宇都宮大学 学生会員 ○小林 直樹
 宇都宮大学 正会員 大森 宣暁
 宇都宮大学 正会員 長田 哲平

1. 研究の背景と目的

近年、地域のコミュニティ維持のための地域活動への動機としてその地域に対する意識、地域愛着が注目されている。地域愛着に関する既存研究では、地域愛着が住民の活動に与える影響として、愛着度合いが高い住民ほど地域の活動に対して協力的になることや、居住継続意思が高くなる傾向があることが判明している。

一方で、地域愛着を醸成する要因として、年齢や居住年数、周辺的生活環境や日常の生活行動が与える影響などがあることが示唆されている。また、外出時に用いる交通機関や利用する店舗の規模等も、人とのかかわりを通して地域愛着に影響を与えていることが示されている。特に店舗や外出手段の要因は地域により事情が異なることが多く、地域愛着に与える影響の差が生じるものと思われる。そこで、本研究では、この差を具体的な数値で示し、地域愛着に対して影響を与える因子を探ることを目的とする。

2. 既存研究の整理と研究の位置づけ

鈴木ら¹⁾は日常生活様式が地域愛着に影響を及ぼしている可能性に着目し、消費行動によって地域風土の接触に差異が生じ、地域愛着の醸成に影響を及ぼすと考え、国内3都市で調査を実施した。アンケートによる心理調査を実施した結果、消費行動が買い物中のコミュニケーションや居住する地域への愛着の程度に影響を及ぼし、買い物中の地域との接触の程度が多い人ほど地域への愛着が高いことを示した。

大谷ら²⁾は地域高齢者の生活範囲が狭くなりがちであることに注目し、交通手段利用の観点から地域高齢者の外出パターンを抽出し研究を行った。その結果、徒歩による外出と地域感情には強い関連性が

あることを示すとともに、自転車は地域感情を支えている要因になっていることを明らかにした。また、路面電車利用は場所愛着得点が顕著に高く、地域への強い好感情を示すことが明らかにされている。

これら既存研究では、都市ごとの地域愛着度合いの比較や、市街地と郊外部で地域愛着に対する意識の比較等が行われている。一方で、郊外部における発展度合いの違いが地域愛着に及ぼす影響は検討事項として残されており、郊外部の中でも急速に発展している場所とそれ以外の場所との間で住民の意識に差があるのかは不明である。

そこで本研究では、宇都宮市の市街化区域及び市街化調整区域における住民の外出実態を把握するとともに、複数の外出目的において地域愛着に対して影響を及ぼしている要因について分析し、両区域における地域愛着度合いの差について検証する。

3. 使用するデータの概要

(1) 「地域住民の皆様の生活行動に関するアンケート調査」の概要

同調査は、宇都宮市が同市清原地区及び国本地区の住民を対象に実施したアンケート調査である。本アンケート調査は、市街化区域及び市街化調整区域の住民の生活行動や地域に対する愛着意識を把握するための調査である。アンケートの対象地域である清原地区の人口は29195人、国本地区の人口は14173人である。得られたサンプル数は両地区合計920人(476世帯)であり、この中で市街化区域の住民と市街化調整区域の住民を住所で分けて分析している。

アンケートの中で、それぞれの住民に対して地域活動への参加度や地域内での交友活動の有無、地域に対する愛着意識の調査、買い物や通院といった生活行動について調査を行っている。

キーワード 地域愛着, 外出行動, 市街化調整区域, 地方都市, アンケート調査

連絡先 〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2 宇都宮大学工学部 TEL: 028-689-6224 E-mail: plan@cc.utsunomiya-u.ac.jp

(2) 生活行動について

生活行動の調査については、外出目的を「食料品等の買い物」「郵便局や銀行」「通院」「その他(公共施設、教育施設等)」の4つに分類し、それぞれの項目で移動頻度の多い複数の行き先・移動頻度・交通手段および所要時間を記入式で調査している。その結果、両地区とも自動車利用が多数を占めるが、市街化区域では自転車および徒歩の割合が市街化調整区域より高くなっている。また、市街化調整区域の住民の方が外出時の移動距離が長い傾向にあり、特に「食料品等の買い物」目的では差が顕著に現れている。

(3) 地域愛着に関する分析結果について

分析においては、構造方程式モデリングソフトウェアである「AMOS」を用い、パス図を描きながら共分散構造分析を行った。地域愛着を問う項目においては、地域愛着を既存研究に基づき「選考愛着」「感情愛着」「持続願望」の3つの尺度に分類して分析している。また、ここでは新興住宅地が目立ち、居住年数が短い住民が増えている市街化区域よりも、市街化調整区域の住民の方が地域に対する愛着が高いのではないかと仮説を立て、分析している。

アンケート調査のうち、地域愛着の項目および地域住民の協力行動意識(近所の人との支えあい・助け合い等)を問う項目との間で重回帰分析を行った結果、協力行動は地域愛着に影響を与えていることが示された。また、地域愛着と地域住民の協力意識や地域内の友好関係には強い正の相関があり、市街化区域・市街化調整区域によって地域愛着には差が生じることが判明した。

5段階で回答された協力行動および地域愛着に関する意識調査では、市街化調整区域の協力関係が平均すると市街化区域を上回っているが、地域愛着の各項目では市街化調整区域よりも市街化区域の方が高い傾向が見られ、市街化調整区域の住民の方が地域に対する愛着意識が高いと予想した仮説とは逆の結果が出ている。とくに、選好愛着および持続願望では両地区ともに差が顕著であり、居住地による影響が出やすいものと考察される。

また、全体の設問で見た場合、地域内の友人の有無が地域愛着に関する項目に与える影響が大きく、特に「感情愛着」に大きく作用していることが判明した。これに加え、外出手段や買い物行動時の移動距離や回数も合わせて多面的に分析した結果、友人や地域住民との交流が与える影響は、外出手段や施設利便性よりも大きいことが判明した。

4. まとめ

アンケート調査から分析を進めた結果、宇都宮市の清原・国本地区の市街化区域・市街化調整区域それぞれにおける住民の生活行動の実態を把握したと同時に、地域愛着に差があることが判明した。外出時の移動手段についても自動車利用が多数を占め、公共交通の利用頻度が極端に低いことが判明した。それとともに、免許及び自家用車を持たない住民の外出行動は、免許及び自家用車を持つ住民に比べ外出回数の減少につながることを判明し、外出距離よりも明確な差が生じることが判明した(図-1)。

また、外出行動そのものよりも、その間の地域住民同士の交流や友好関係によって醸成されるものが地域愛着醸成の最も大きい要因となることが判明した。これについては、市街化区域と市街化調整区域における人口密度の違いや施設の立地、自然環境等の要因が住民同士の交流や友好関係に及ぼす影響について、今後の課題として引き続き調査していく。

参考文献

- 1) 鈴木春菜, 藤井聡: 「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集 D3, Vol. 64, No. 2, 190-200, 2008. 4
- 2) 大谷華, 芳賀繁: 地域交通環境の利用が高齢住民の地域愛着に及ぼす影響, 立教大学心理学研究 45, 1-9, 2003-3-31

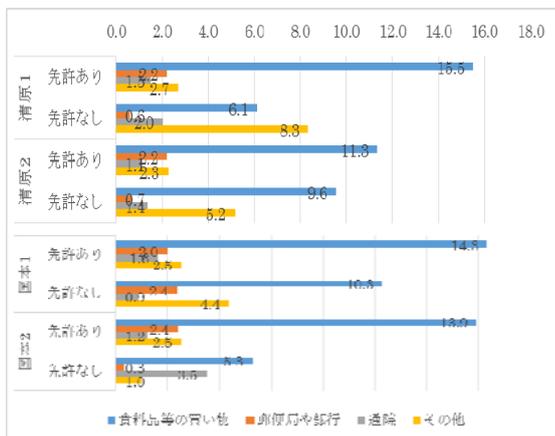


図-1 地区別・免許の有無別の目的別外出回数